岩波ジュニア新書 59

未知の国 すばらしい人たち

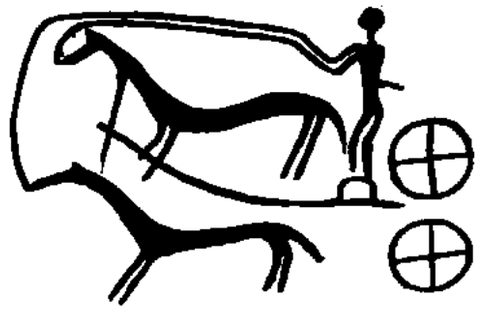
カメラマン世界取材日記

田沼武能著

未知の国 すばらしい人たち

——カメラマン世界取材日記——

田沼武能著



岩波ジ

未知の国 すばらしい人たち　　岩波ジュニア新書 59

1983年3月18日　第1刷発行 ©

定価530円

著　者　田沼武能（たぬま たけよし）

発行者　緑川亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-265-4111
振替 東京6-26240

印刷・精興社　製本・永井製本

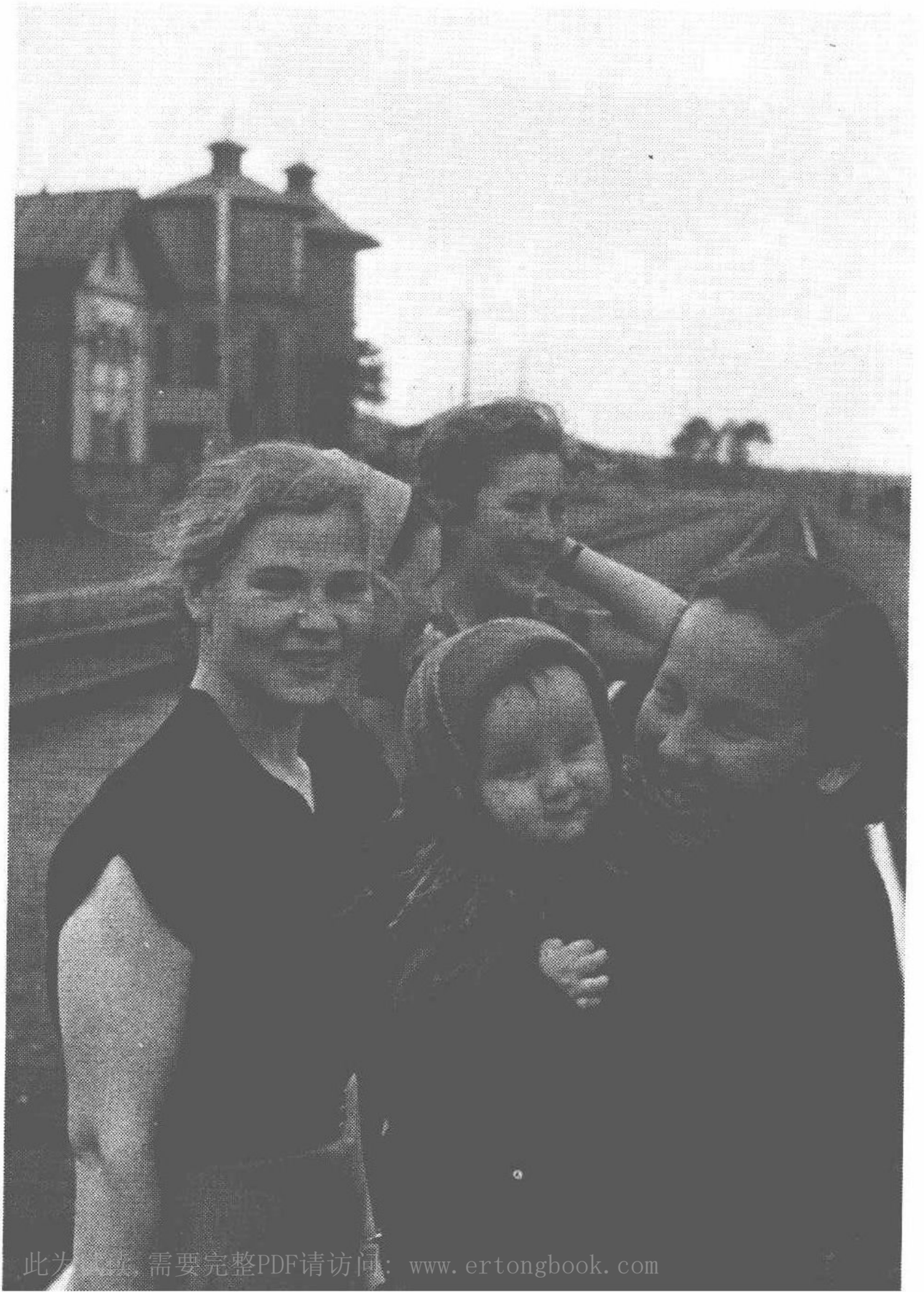
落丁本・乱丁本はお取替いたします　　Printed in Japan

目　次

I　シベリア鉄道九〇〇〇キロ……1
II　はじめてのアメリカ……43
III　私のすきなアンデス……67
IV　コーヒーの元祖エチオピア……101
V　インドネシア取材行……143
VI　ヨーロッパの旅……173
VII　アラブの国ぐに……203

I　シベリア鉄道 9000 キロ

限りない平原．そこには出会い，別れ，ロマンがある



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一声

一九五七(昭和三二)年七月一九日朝、私は〝ボォー、ボォー〟という大きな汽笛の音で目をさました。あわてて服を着がえ、デッキにかけあがると、船は新潟港岸壁からはるかに離れ、もう見送りの人たちの顔が米粒のように小さくなっていた。

「しまった、見送りの人たちをすっぽかしてしまった……」

これが、はじめて外国に出発した私の第一声であった。

私は呆然として遠く離れてゆく港をながめながら、出発までのさまざまなできごとを思いうかべていた。

鉄のカーテン

一九五七年というと、太平洋戦争敗戦の混乱期をすぎ、朝鮮戦争の影響で日本経済は〝神武景気〟にわいた直後で、「もはや戦後は終った」という流行語がでた時代であったが、まだ現在のように日本経済は隆盛ではなかった。

政府はすくない手持ち外貨を経済再建のため有効に使おうと、一般人の海外旅行をきびしく制限していた。私たちカメラマンとて、海外に出ることは、いまでは考えられぬほど至難の業であった。

この年、モスクワで〝世界青年平和友好祭〟が開かれることになって、日本に五〇〇人の招待があった。海外に出たくてたまらなかった私には、千載一遇のチャンスである。その上、〝鉄のカーテン〟といわれ、一般人にはなかなか入国許可がおりないソ連に行かれるのだ。このチャンスをのがしたら、いつまた行かれるか分らない。

私はさっそくパスポートに必要な書類をそろえて事務局に提出した。しかし、国交も正常でない国に五〇〇人もの青年を送るわけにはゆかぬと、渡航申請は外務省であっさり却下されてしまった。

渡航を希望した者は、なんとかして海外に出たい、外国を自分の目で見て確かめたいという、情熱に燃えている青年ばかりである。もちろん簡単に引きさがるはずがない。それからえんえん二カ月にわたるパスポート獲得運動がはじまった。外務省への陳情・座り込みをして警官に退去させられたり、代議士への陳情などなど、あらゆる手をつくした。

そして、最終的に一五〇名にだけパスポートが交付されることになった。五〇〇名から一五〇名にしぼる選考が夜を徹して行われ、写真代表として私の参加が決定したのは、出発当日の明け方であった。

シベリア鉄道の始発駅チホーカンスカヤの歓迎人

出発まで

私は一日たらずの間に、トランク二個、三〇〇本のフィルム、カメラ四台に交換レンズ、衣類などの旅行用品のほかに薬からちり紙、みやげ用小物にいたる携帯品をそろえ、その夜、上野駅から新潟港に向け出発した。

夜行列車内は、みんな興奮していて、とても寝るような状態ではない。翌朝、新潟に着いてからは、結団式や税関の手続き(私はたくさんのカメラ、フィルムを持ち出すため特別の申告をしなければならなかった)にかけまわり、夕方、乗船した時は、〝これで出発できる〟との安堵感から、疲れがどっと出て、翌朝六時の出帆を寝すごしてしまったのだ。

はじめての客船

私たちを乗せたソ連船、アレキサンドル・モジャイスキー号は、九九二〇トン、カムチャツカ＝ナホトカ定期航路の客船である。生れてはじめて見る客船はすべてがめずらしい。廊下にまでじゅうたんがしいてあり、立派なサロンにはピアノ、アコーデオン、ギターが無造作に置かれている。当時、日本では見たことのない豪華船であった。共産国でもマドロス(船乗り)には〝いれずみ〟がつきものと見え、腕に〝いれずみ〟をした船員もいた。

やがて食事の時間となり食堂に入った。立派な食堂には四人のウェイトレスが汗を流し

て働いていた。テーブルの中央には、黒パンが山積みに置いてある。団体だから注文の必要がない。

待つこと一時間、太ったウェイトレスが、「パジャールスタ クーシェチ(どうぞ、お食べなさい)」と料理を運んできた。そのメニューは、魚の油づけ、野菜サラダ、ザクスカスープであった。黒パンは、いつ焼いたものか、かんでもスポンジのようで歯がたたない。すっぱいのとかたいのとで、みんなに敬遠され山積みになっていたらしい。料理はボリュームがあり、油が強く、味がうすい。いろいろ文句をつけていたが、はじめて食べる本場のロシア料理である、残すことなくたいらげてしまった。

夜の日本海は波が静かで、船はすべるように航跡を残して走る。空には満天の星が降るように美しく輝いていた。

ナホトカ上陸

翌朝、デッキに出てみると、体操選手のトレーニングがはじまっていた。私は、海上では撮影するものもなく、サロンとデッキと船室を熊のようにうろうろしていた。

昼食は二時からはじまった。食堂からシベリアの陸地がかすかに見えてきた。なにしろ、テーブルに着いてから料理が出るまでに一時間近くかかるのだから、きがきでない。〃ボ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ォー、ボォー〃と汽笛の音がするので、食事もそこそこに切りあげてデッキに出ると、もう出迎えのソ連船が、私たちの船に近づいていた。

船は四時半に着岸した。桟橋(さんばし)には、ナホトカ中の若者たち全員が集合したのではないかと思われるほど、たくさんの人の出迎えである。その人たちの手には花束が持たれ、全員が花束をあげ手を振る光景は、さながら桟橋にお花畑が出現したようであった。

私たちの世代は、ナホトカという地名には、暗い印象しか持ち合わせていない。ナホトカは、敗戦後、ソ連からの引揚げ者たちが、シベリアの厳寒と重労働と飢えを死ぬ苦しみでのりこえ引揚げ船を待ちこがれた港なのだ。彼らが、このナホトカ港を去る日、どんな思いであったろうか。……そんなことを考えると、この盛大な歓迎は、時代の違いとはいえ複雑な気持ちであった。

とはいっても、シベリアの大地に第一歩を踏み入れるのだ。そして〃シベリア鉄道〃の旅がはじまる。第二次大戦後、正式にこの鉄道を利用するのは私たちがはじめてである。感傷的になりかけていた私の心は、歓迎人の「ミール イ ドルージバ(平和と友情)、ミール イ ドルージバ」という大歓声にのみこまれ、興奮と感激のとりこになってしまった。

ハバロフスク駅では，食料の積みこみ，車両の点検が行われた

大歓迎

私たちは、歓声のあがる人垣をぬうようにして、桟橋からチホーカンスカヤ駅に向かって歩きはじめた。人垣の間から娘さんが飛び出してきて、花束をプレゼントしてくれる。花は野でつんできたのだろう、根や土がついている。別の娘さんは、自分の胸につけているバッジを私の胸につけてくれる。いやぁ、こんなにもてたことは生れてはじめてである。その娘さんたちはみな、もうれつな美人ばかりだ。

「スパシーバ(ありがとう)、スパシーバ」のひと言と笑顔で応えるばかりの私は、ロシア語が話せないのがもどかしくてならなかった。

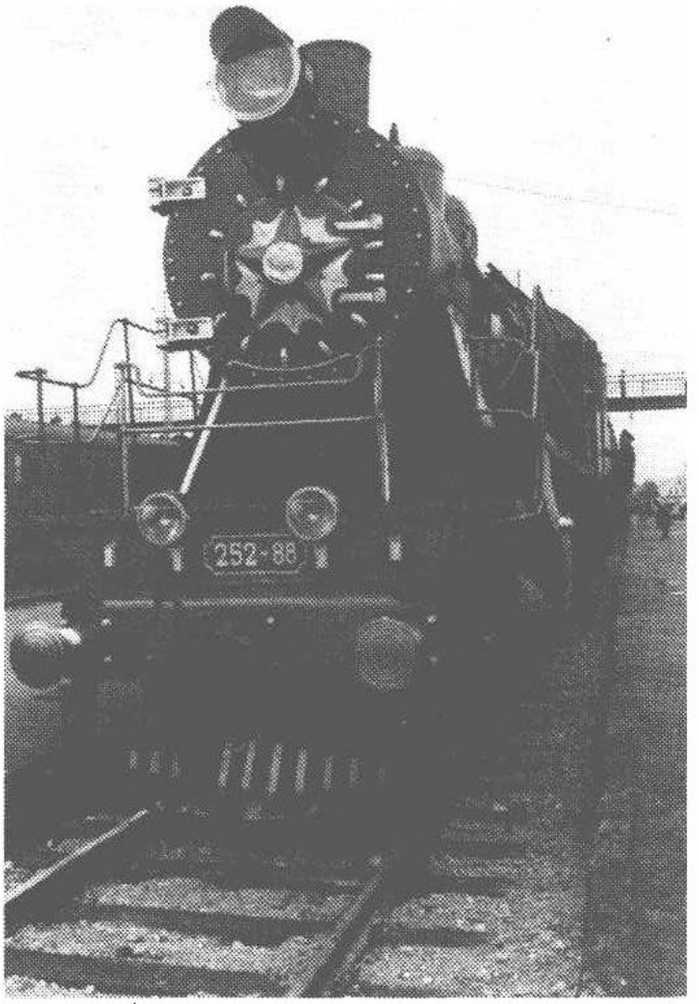
日本代表団とナホトカ市民の歓迎式典が駅で行われている間に、私たちの荷物は車内の所定の席に運ばれていた。

午後六時、発車のベルを合図に、列車はゆっくりと走りはじめた。窓の外では、プラットホームにあふれんばかりの歓迎の人たちが、「ドスビダーニャ(さようなら)、ドスビダーニャ」とさけんでいた。私は、はじめての外国の地シベリアに上陸したよろこびと歓迎の人波で、すっかり興奮しきっていた。

シベリア鉄道

シベリア鉄道の列車は一四両編成であった。牽引(けんいん)するSL(蒸気機関車)はП(ペー)36型という動輪四軸のもので、機関車の先頭には、赤い星とレーニンの像がついていた。このSL、ものすごく大きい。日本のSLと比較すると親と子の差である。もちろん、レールの幅も広軌で、一五二四ミリある。いま走っている新幹線のレール幅よりまだ広いのだ。

私たちの客車は〝硬席〟と呼び、上下二段のベッドが廊下と平行して一列と、横に入りこんで向かいあわせに二列ずつついている。廊下に平行しているベッドは、昼間、テーブルと向かいあわせに二つの座席に組みかえるようになっている。硬席とは、板張りで硬いので、その名がつけられているのだ。もっと上等なのが、座席がビロード張りの〝軟席〟で、四人のコンパートメントで窓側に



日本の倍も大きいSL

はスタンドもついている。

板張りベッドの上には薄いクッションがしいてある。ベッドの大きさも外国人の体格にあわせてあるので日本人にはゆったりしている。上段ベッドを折りたたまずに下段ベッドに座っても頭があたらない。

六〇人乗りの車両に一つのトイレがついている。トイレは洗面所と共用で広い。便器はもちろん洋式で、私が座り用をたそうとすると、足が宙に浮いてしまう。洗面器の蛇口は押しボタン式で、押した時だけ水が出る。洗面器に栓がないので、顔を洗うときには、片手でボタンを押し、片手のたなごころに水をため顔を洗うことになる。猫が顔を洗っているようで、とても使いにくい。ドアも金具も大ぶりでがんじょうにできている。大きな荷物は天井裏に収納できるようになっている。

時計をかくす

私にとっていちばん困ったことは、窓ガラスが二重になっている上に、よごれていることだった。冬期は零下四〇度をこす寒さになるので、二重ガラスは無理ない話だが、なんでも撮(と)ってやろうと張り切っている私には、走っている間の風景を撮影できないのが、なにより困る。

列車はコトン、コトンとレールの音をひびかせながら快適に走る。日本の汽車よりゆれ

ハバロフスクは大都会だ．駅に集まる乗客も多く，服装もよい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com